

編集後記

遊星人編集幹事の野津翔太です。遊星人は2026年3月号(今号)より、正会員(一般・学生)の皆さまへの冊子版送付が廃止となり、電子版(PDF)のみでご覧いただく形となります。冊子版の入手を希望される場合は、新たにPOD(プリントオンデマンド)での購入が可能となります。なお、購読会員・賛助会員の皆さまへの冊子版配布は継続されます。創刊35年目にして新たな体制でスタートを切る遊星人、引き続き奮っての記事投稿、お待ちしております。

今回の遊星人、大野和正さんの最優秀研究者賞受賞記念論文では、ジェイムズ・ウェッブ宇宙望遠鏡(JWST)の観測により近年急速に進展を見せる太陽系外惑星大気の理論・観測研究について、惑星形成研究との連携の視点も交え紹介されています。大野さんが理論研究をベースにJWST系外惑星大気観測研究に取り組まれた経緯は、ご本人が「遊星人の海外研究記」の記事(2024年6月号、「その14 ~コロナ禍でのアメリカ研究生生活~」)の中でも紹介されています。また系外惑星研究に関して、遊星人では2013年から「系外惑星「遠い世界の物語」」という連載記事を現在までに計17編掲載しております。大野さんの受賞記念論文と合わせてご覧頂き、近年の太陽系外惑星研究の発展をぜひ味わって頂ければと思います。

その他今回の遊星人、連載記事の「金星あかつき・ラストデイズ」では、2025年9月の停波運用を踏まえ、「あかつき」プロジェクトの四半世紀の歩みを振り返って頂いております。その他にも、2026年度の探査機打ち上げを目指し準備が進む火星衛星探査計

画MMXの対談記事、各種研究会の報告記事など、興味深いラインナップです。

ところで、私は現在所属する東京大学理学部 地球惑星物理学科・地球惑星環境学科においていくつか授業を担当しているのですが、そのうちのひとつが地球惑星環境学科3年生向けにプログラミング(Python)の基礎およびデータ解析手法を教える計算機実習の授業となります。様々なデータ解析ソフトウェアの登場のほか、公開コードの普及や生成AIの登場・普及と共に、データ解析や数値計算の参入障壁は確実に下がっていると言えます。それ自体は研究の効率化にも繋がり良い事ではあり、惑星科学分野においても大規模データ解析の手法は今や欠かせません。(試しに某AIに惑星科学分野における応用例を聞いてみると、探査機が撮影した太陽系内惑星・衛星・小惑星の画像解析や、太陽系外惑星探索などを回答してきました。)一方で注意しないと背景の原理や物理を「ブラックボックス」として理解しないまま、解析・研究が進んでしまうという側面もあります。授業では研究現場を想定した簡単なデータ解析の例について、自分で一からコードを書く経験をしてもらっていますが、そういった経験を積むことで公開コードや生成AIとうまく付き合う術を身につけてもらえれば良いな、と感じる今日この頃です。(編集幹事 野津翔太)